

11月第1週の礼拝説教

■日 時：2025年11月2日（日）10：30～11：30 降誕前第8主日礼拝
(召天者記念礼拝)

■説教：保科けい子牧師

■聖書：新約：ヘブライ人への手紙 11章 13～16節（新約 P415）

■説教題：「天の故郷を」

■讃美歌：493（いつくしみ深い 友なるイエスは）
385（花彩る春を この友は生きた、）

本日の礼拝は、特に召天者記念礼拝としてささげております。元々は、カトリック教会において天に召された聖人たちを覚える11月1日の「万聖節」、あるいは「諸聖人の日」とも呼ばれる日にその起源があります。私共のプロテスタント教会は、聖人と呼ばれる特別な人がいるという考え方をしませんので、多くの教会では11月の第一の主日礼拝が召天者記念礼拝として守られ、この日は天に召されたすべての人々を覚える日となりました。私共の立川教会は今年で教会創立74周年になりますが、その間に多くの方々が天に召されました。それらの方々を覚えながら、ご遺族の方々にご連絡を差し上げました。本日はお越しくださった方々と共に、礼拝をささげてまいりたいと思います。昨日、写真を飾っている時に、初代の江口忠八・ハナ牧師ご夫妻をはじめとして、立川教会の会員であられた方、そのご家族の方々、そして、様々な形で立川教会をお支えくださった方々のお一人お一人を想像していました。これらの方々も神様に愛され、そして、天に召されていかれたということをしみじみ感じさせられました。

ところで、本日の聖書箇所も含まれるヘブライ人への手紙の11章は、「信仰」という見出しがついています。「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。」という有名な1節の御言葉から書き出され、旧約聖書に登場している有名人が名を連ねています。旧約聖書を読む時には忘れてはならない名前です。世界が本当に堕落して争いと滅びという状況になっていた時に、神様は御自分が作られた世界をご覧になって、この世界を滅ぼしてしまおうと思わました。しかし、そのような中で、ノアとその家族だけが神様に従って歩んでいたのです。そのありさまをご覧になって、神様はノアに箱舟を作らせました。その中に彼らが入ることによって、洪水が起こった時にノアとノアの家族だけが救い出された、と聖書は語っています。それから、アフラハム、イサク、ヤコブですが、皆、これは旧約聖書の中で、神様と契約を結んで、神様の示される道に従っていた人々です。その代表者が、行く先も知らずに神様のみ声のみに従って行動したのが、「信仰の父」と呼ばれるアフラハムです。イサク、ヤクブはその子孫、ということになります。その一人一人は生きた時代も状況も異なります。しかし、彼らに共通するのが「信仰によって」という言葉で表される生涯です。

そして、本日の聖書箇所13節に「この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。」と書かれています。彼らが死ぬまで信仰を持っていたということを、「信仰を抱いて死にました」という表現で説明しています。それは、言い換えれば、死ぬまで神様を疑うことなく、信じて歩み続けたということです。ただし、「約束されたものを手に入れませんでしたが」とも記されています。信仰を抱いて歩んで来たのだけれども、神様が約束してくださった乳と蜜の流れる地、あるいはこの世の豊かな生活、そういうものは手に入れなかつたのです。「はるかにそれを見て喜びの声を上げ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいであることを、公に言い表したのです」と記されています。この礼拝に集われている方々

のなかでは、洗礼を受けた方もおられます。そのような方々は、イエス様を信じます、神様を信じます、という告白を持って洗礼を受けられたはずです。けれども、それだからといって、神様が特別に、あなたは洗礼を受けたから豊かな生涯を送れるよとか、あるいは、様々な祝福や他の人にはあげないような賜物をあげるよ、と約束されたわけではありません。ただ、神様の示される方向に歩んで行く、それは決して目に見えるようなものではないと思います。その目に見えるものではないもの、それが11章16節に「天の故郷」と記されているものです。信仰とは、その内容が全部は分からなくても、神様の言葉に従って導かれる道に身を委ねていくこともあります。

私たちは自分の歩みを考えるときに、神様が私たちにお与えくださるもの全部が見えているわけではありません。神様を信じて歩んでいるのに、なぜこのような苦悩に満ちた生活をするのかと疑うこともあります。あるいは世界に目を転じると、神様がこの歴史や世界を支え導いておられるというのに、相変わらず人と人が殺し合い、国と国が紛争を起こし、悲惨な状況がそこに広がっているのはなぜか、と悩んでしまうこともあります。それを思う時に、神様などいるはずがない、もし神様がおられるとしたらこのように悲惨な生活はあるはずがない、と思ってしまうことも多いのではないかでしょうか。しかし、「天の故郷を」目指して歩むということは、そういう中にあっても、必ず神様が私たちを導き、支えておられる、というところに立って歩み続けるということなのです。

ところで、召された方々を覚える意味は、私たちもいつか必ず死を迎えることをはっきりと意識することにあります。これは厳粛な事実です。私が時々思い出す言葉に、「メントモリ」という中世ヨーロッパの修道院で使われたラテン語の挨拶があります。「死を忘れるな」という意味を持つそうです。修道士たちは、人間の命がいかに儚いものかを見つめ、死がいつ訪れてもおかしくないという事実を受け入れ、その上で神様への信仰を深め、倫理的な生き方を追求したと言われています。しかし、この言葉は彼らのような特殊な立場に置かれた者だけのものではないと思います。死を忘れないで生きるところに、私たちの歩みに深さが増してくるはずです。そして召された方々は、私たちの人生の先輩です。人として大切なことを、私たちが学ばせていただくことができるのです。いつか私たちが天に召される時、今度は私たち自身が、家族や友人や様々な方々に何かを伝えていくように、今この時から「天の故郷を」目指して新しい歩みを始めたいと思います。

本日の聖書箇所を読んでいて思い出した御言葉があります。それは、使徒言行録16章31節の「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」という箇所です。使徒パウロとシラスが主イエス・キリストの十字架の福音を宣べ伝えていた時に、捕らえられ、衣服をはぎ取られて何度も鞭で打たれ、木の足枷をはめられて牢に入れられました。そのような状況にある時に大地震が起こりました。牢の土台が揺れ動いて、牢の戸がみな開いてしまいました。すべての囚人の鎖も外れてしまいました。囚人たちが逃げてしまつたのではないかと考え、その責任を問われて死刑に処されると思った看守は、剣で自害しようとしました。その時に、「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる。」と大声で叫んで、看守の自害を止めたのが使徒パウロです。直後に、看守は「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。」と二人に問い合わせたのです。それに対する二人の答えが「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」という言葉でした。教会に集い信仰者として生涯を終えられた方々は皆、その言葉に励まされ、家族の救いのために祈り続けたのではないか、と私は確信しています。それはまた、教会の祈りでもあります。立川教会に様々な形で関わりを持ってくださった多くの方々を覚え、私たち自身の救いのためにも、主イエス・キリストを信じてまいりたいと思います。

祈ります。

主なる神様、

今日は召天者記念礼拝として、すでにあなたのみもとに召されたお一人お一人を、ご遺族の方々と共に覚えながら礼拝を捧げております。すでにあなたのみもとに召された方々が、どのような祈りをもって、ご家族のために、あるいは友人知人のために歩んでおられたか、を覚える時もあります。そのような祈りに支えられ励まして、私たちは今日ここにあります。そのことを深く覚えながら、私たちも、家族のために、友人知人のために、この世界のために祈ることができますように導いてください。この祈りを主イエス・キリストの御名によってお捧げいたします。アーメン。